

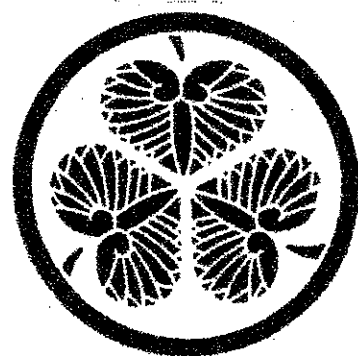
4代将軍・徳川家綱と越谷の関係も、越谷のシビック・プライド

シビック・プライド越谷新聞

第4号 * 令和8年7月1日 * 旧日光街道・越谷宿を考える会 * 越谷のシビック・プライドを楽しむ会 * 発行

家綱9歳。大納言の時代の日光社参で、帰途に越谷御殿で宿泊

将軍が、ご先祖の家康の墓参に出かける「日光社参」
は、江戸時代に合計19回行われました。息子・秀忠
が4回、孫・家光は10回、次の代の家綱は2回、そ
の後の11代では暴れん坊将軍・吉宗の1回を含めて
3回しか行われていませんでした。



徳川家綱の家紋

家綱の日光社参

家綱は9歳のときに大納言として、その後、将軍として~都合2回、家康のお墓詣りをしています。9歳のときは日光街道を^{だいなごん}通^{だいなごん}って越谷入りし、昼食を越谷御殿で食べて、宿泊先の岩槻城へ向かいました。

そして、日光からのお帰りには、岩槻を出て越谷御殿に入る前に、橋~たぶん、大沢橋?~のところで、輿をとめて^{こし}供^{とも}の者たちの行列をご覧になり、4時ごろに御殿に入られ、一泊されて、翌日に江戸城へ無事にお戻りになりました。

家綱は、お城の中では聞き分けのよい子ではなかったようですが、社参の道中では「いい子ちゃん」を通し、随行の大人たちを喜ばせたとのこと。

家 綱 の 将 軍 ぶ り

家綱は、確かに父・家光から後継者に〜と考えられてきてはいましたが、寿命がこんなに早く終わるとは計算できなかったようで、息子に帝王（将軍）学をシッカリ教えるヒマもなく、48歳で亡くなってしまいました。



徳川家綱

徳川歴代将軍事典（大石学編 吉川弘文館刊 2013）

11歳の家綱の大幸運だったのは、父の周りにいた重臣たちが賢明で、それでいて、自分のための政治をしなかったことです。なにしろ、家綱は11歳です。「さようにせい（そのようにしろ）」というしかなかったでしょう。

そのため、「左様^{さよう}せい様^{さま}」というあだ名がついたのです。しかし、あなたが小学校3年生で、学校で校長先生はじめ、教頭先生、体育の先生などに取り囲まれて、何かいわれたら、どうするか〜を考えてみてください。おとなたちが「〇〇しましょう」といえば、「そうしましょう」というしか、ないですよ。他人に笑われようが、「自分の考え」を持ってないと陰口^{かげくち}をたたかれようが、そうするしかなかった少年時代だったのです。

しかし、家綱にとって、最高によい環境でした。周囲にいるのは、選りすぐりの優秀な補佐役ばかり。それらの大老、老中たちが「国のため、徳川のため」を基準として選んだ最良策を説明してくれば「さようにせい」と答えて、次回のために覚えておけばよい。家康さんが幼少^{みぎり}の砌、人質として今川の城に預けられている間、家庭教師役の老師・太原雪齋^{たいげんせつさい}の側で教えられた以上の学習環境で、家綱は「将軍学^{しょうぐんがく}」を身に付けることが出来たのではないのでしょうか。

こころやさしい将軍・家綱さん！

○竹千代の^{しお}仕置き始め

島流しとなった罪人の話を聞いて、「彼らは何を食べているのか」と尋ねた。

家臣たちは、誰も答えなかった。竹千代（家綱の幼名）は、さらに「^{るざい}流罪にすることで、命を助けたのに、なぜ、食料を与えないのか」と聞きました。

そういう話を聞いた父・家光は大変喜び、「これを竹千代の仕置き始めとせよ」との命を出したのです。家綱の発言によって、流人についても、一定の食料が与えられるようになったとのこと。

○「とおめがね」のすすめ

将軍就任から間もないころ、江戸城の天守閣に登ったとき、家臣から「これを使えば、町の様子がよく見えます」と、とおめがねをすすめられたのですが、もし、将軍が天守から見下ろしていると知ったら、^{せじん}世人は監視されているような嫌な思いをするに違いない〜といい、以後も城下を見るのには使いませんでした。

○吸い物の中の髪の毛

家綱が食事中、吸い物を飲もうとしたとき、お^{わん}椀に髪の毛が入っていることに気がついたのです。家綱は、髪の毛を箸でつまみ、取り除きました。配膳担当があわてて、新しいものと交換しようとする、家綱は「その汁は捨てて、「椀を空にして、下げるように〜」と言ったのです。誰も^{とが}咎められることのないように〜という心優しい配慮がうかがえるエピソードとして残っています。

家綱の時期を合議で乗り越えて～

世界史の中でも例の少ない「戦争のなかった時期が260年間」も続いたパックス・トクガワナ（徳川の平和）の中で、徳川政権が最も危なかった時期は実は、この家綱の時期だったのかも知れません。家康から秀忠・家光～武力をバックに政権をガッツリ作り上げた時期が終わり、世は平和になったけれど、不要になったヒトが藩の中にも、世の中にも溢れ、武断政治から文治政治へ移行しなければならぬ時期であることは分かってはいるけれど、前例のない政治をすることは、舵取りが、むつかしくて・・・・・・・・

☆武断政治～「武家諸法度」などの厳しい法令を定め、これに違反した大名の領地没収や改易（家の取りつぶし）などを強行する政治

☆文治政治～強圧を排し、学問、教育の奨励、法律、道徳を重んじる政治

家綱は11歳。しかし、酒井忠清、松平信綱、阿部忠秋など、家光時代からの名臣が数多く残っており、父・家光が遺言で託してくれた保科正之も含め、私心を抑えた名臣達が合議制で話し合いをして決めてくれました。「下馬將軍」忠清も、多大な害を流したほどではなかったようで～江戸城大手門の下馬札の前に忠清の屋敷があった～家康、秀忠、家光の三人によってつくられたとも思われるのが徳川政権ですが、4代目に出てきたのが家綱だったので、政権はあの260年のパックス・トクガワナ（徳川の平和）をつくることができたのか～と思われることもあるようです。日本に平和をもたらした家康、そのあとの2代で、武力が幅をきかした

時代から文治の時代へとカーブを切ったわけですが、この時に政権を引きついだのが 11 歳で何もわからない家綱だったからこそ、世の中が保たれたのではないか～ということ。たしかに、保科正之、酒井忠清、井伊直孝などの優れた後見役がいて政権をリードしたのですが、その名目的なトップが家綱でなくて、物心つきすぎ、自分で何かをしたいという人物であったりしたら、どうなったでしょう。家綱さん、よかったねと、お慶びを申し上げたいところです。

家綱さんの「三大美事」

○家綱の施策で、「三大美事」といわれるのは、次の通りです。

①末期養子禁止の緩和～大名が瀕死になってからの、家を断絶させないための養子です。跡継ぎがないことで改易される大名家が増え、家来が失業して大きな社会不安を招きつつあったのです。家綱の將軍になったころに起りかけた由井正雪の乱などを教訓とした施策です。

②殉死の禁止～主人が病死したような場合でも、忠誠心の証として家臣の殉死が後を絶たず、優秀な人材を失うことになりかねませんでした。

③大名証人の廃止～大名や家中の重臣の妻子などを幕府の人質として江戸に住ませることで、その人質を「証人」といいました。まず、家臣について廃止され、その後、妻子も帰国が認められるようになりました。

参考書

○新訂増補国史大系 40 徳川実紀第3編 黒板勝美編 吉川弘文館刊 2002 ○講座日本近世史4 松本四郎・山田忠雄編 ・家綱政権論 藤井譲治著 有斐閣刊 1980 ○徳川將軍列伝 北島正元編 ・徳川家綱 林 亮勝著 秋田書店刊 1989 ○徳川歴代將軍事典 大石 学編 吉川弘文館刊 2013 ○將軍の世紀 山内昌之著 文芸春秋刊 2023 ○保科正之言行録 中村彰彦著 中央公論新社刊 2009 ⑤

振袖火事 ①

家綱時代（当時 16 歳）に起きた大災害、10 万人以上も死者を出したという、江戸時代最大の火事・振袖火事です。明暦 3 年におこったので明暦の大火ともいわれます。その原因といわれるのはいくつもありますが～

①本妙寺失火説 ^{ほんみょうじ} 麻布の裕福な質屋・^{あざぶ} 遠州屋の娘・梅乃（数え年 17 歳）が上野本妙寺に母とともに墓参の帰り、寺の小姓らしい美少年に一目惚れ。この日から寝ても覚めても彼のことが忘れられず、恋の病におちた。案じた両親が彼の着ていたと同じ柄の振袖を作ってやると、それをかき抱いて思い焦がれていたが、ついに亡くなってしまった。親はせめてもの供養にと娘の棺に振袖を掛けてやりました。寺男たちがそれを転売、上野の町娘・きの（16 歳）のものとなりますが、彼女も病で亡くなり、棺にかけられた振袖はまた本妙寺へ。それを町娘・いく（16 歳）が手にいれたが、彼女も亡くなり、振袖は本妙寺へ。住職が振袖を寺で焼き供養しようとしたが、^{ごま}護摩の火に投げ込むと強風が起り寺の軒に火が移ったのが大火の始まりといえます。

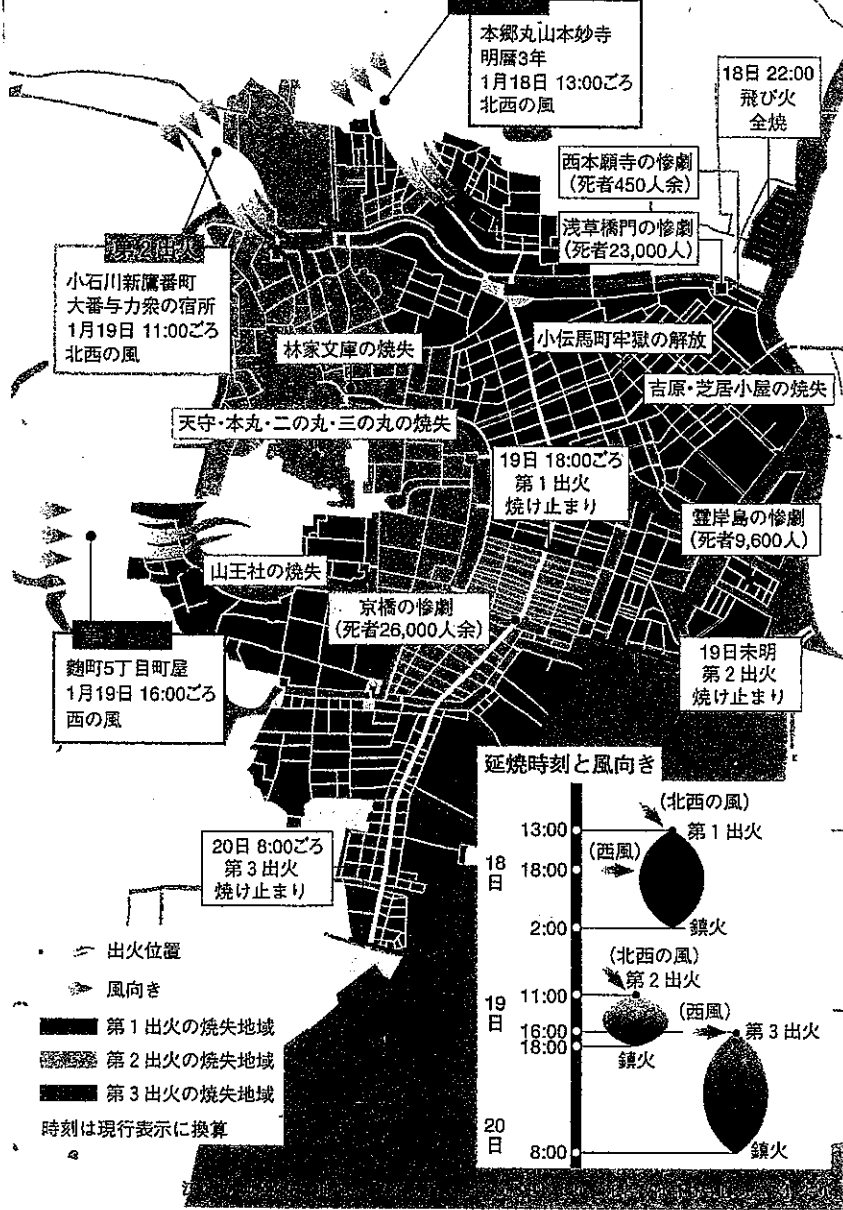
<娘の名前・家、父母の名前などについても、各説あるようです>

②幕府が都市改造をはかるために放火したとする説

③本妙寺火元引き受け説 火元は隣の^{ろうじゅう}老中・阿部忠秋の屋敷。幕府の要請で火元を引き受けた。本妙寺が罰を受けず、逆に大寺院となったとか、大正時代まで、阿部家から莫大な供養料が奉納されていたとかの理由から～

振袖火事 ②

明暦の大火焼失地図



○振袖火事の際、家綱をどこにお連れするか—

翌日には江戸城天守閣に類焼し、本丸・二の丸も焼失した。家綱は輿に乗って本丸から西の丸に難をさけた。西の丸の前庭にいる家綱に、酒井忠勝が「私の^{しも}下屋敷へ」という。松平信綱は上野寛永寺をすすめ、井伊直孝は自分の下屋敷へと申し出て、阿部忠秋は「何事もないのに、城を出るのは天下の^{ちょうしょう}嘲笑をうけることだ」と反対し、家綱も「城を出てどこに行くのか」といい、

ビジュアル・ワイド江戸時代館・第2版 小学館刊 2002 城内にとどまった。

○万治2年（1659）、江戸城本丸が復興したが、天守閣は再建されなかった。

保科正之が「天守は遠くを見るのに便利だというだけである。このようなものに費用をかけるのは無駄だ」と井伊直孝・酒井忠勝に話して、廃止。

○回向院は、振袖火事の焼死者 9653 柱を合葬した「万人塚」から始まった。

○振袖火事後の江戸・新都市計画の骨子は次のとおり。①江戸城内の大名屋敷の城外移転②寺院の周辺地域移転③^{ひろこうじ}広小路設置④主要道路を幅 6 間から 10 間に拡張。⑤両国橋の架橋

義人・賢臣・保科正之

○慶長16(1611)出生 寛文12(1672)逝去

○正之は2代将軍・秀忠とお静しず(秀忠の乳母

「大姥局おおうばのつぼね」)の間の子。秀忠の正室「お江ごう」が側室

の存在を許さなかったので、お静は懐妊が分かるや

いなや「見性院あなやまのぶきみ(武田家臣・穴山信君の妻)」に預けら

れた。正之は7歳を迎えて、秀忠からたかとお高遠藩・保科正光まさみつの養子となるよう指示

され、同藩3万石の小大名となる。その後、兄の3代将軍・家光に見出された。

寛永9年(1632)の家康17回忌に家光の日光東照宮参拝に同行し、官位を10

万石相当に引き上げられ、寛永13年(1651)には山形藩20万石、寛永20年

●●● (1643)には会津藩23万石を与えられ、会津松平家を創始。慶

●●● 安4年(1651)に家光が亡くなると、遺言で4代将軍家綱の

●●● 補佐を託されました。

○江戸幕府から松平まつだいら姓を名乗ることも許されながら、養父・保科正光への
恩義を忘れず、最後まで保科姓を名乗り続けました。

○正之の私心のなさは、振袖火事の際、幕閣たちから、「あなたの芝なかやの中屋
敷しきは焼けたのではないのでしょうか。ご家族はどちらに逃げられたのですか」
と聞かれた折に、正之は「こんな時に、自分の屋敷や家族のことを考える
暇はないものですね」と答えたという。山内昌之東大教授は「正之ほど、
補佐役として最高経営陣に参画するにふさわしい『ノブレス・オブリジ
ュ』(高い身分に伴う義務)を備えた人物も珍しい」と書かれています。

○会津松平家は、「どんなことがあろうとも、徳川家への忠義を尽くす」と
いう「託孤たつこのいめいの遺命」を守り抜き、最後まで徳川家と運命を共にしたのです。



保科正之
絵画史料 江戸時代復元図鑑
遊子館刊 2016